生徒指導教育研究会

部　　長　田　口　英　樹
研究主任　鈴　木　博　之
部 員 数　　３５名

１　研究主題

自己指導能力の育成をめざして
～　留意する実践上の４つの視点から　～

２　はじめに

近年、子どもたちを取り巻く環境が大きく変化する中で、生徒指導上の課題がより一層深刻化している。スマートフォンやゲームなどの通信機器を介してしか人と関われない子ども、自分の宿題よりも家事や子守りの手伝いを優先させられる子ども、幼少期に親から十分な愛を注がれずに育った子どもなど様々である。特定の友人としか付き合えない、些細な事ですぐにトラブルになる、我慢することが苦手ですぐ相手に手を出してしまうなど、集団で生活していく上で、問題を引き起こす児童生徒はどの学校・学級にも見られる。こういった状況から、良好な人間関係を築き、様々な場面で適切に判断し、行動することができる自己指導能力の育成はとても重要であると考える。

３　研究経過

自己指導能力の育成を図るために、①自己存在感を感受させる活動、②共感的な人間関係を育成させる活動、③自己決定の場を提供する活動、④安全・安心な風土を醸成できる活動の４つの視点から研究に取り組んだ。

研究方法は、各学校の学年・学級で取り組んでいる独自の教育活動（あいさつ運動やスマホ教室など）をレポート形式でまとめ、報告してもらった。そして、その活動について各小中学校の生徒指導担当者が話し合い、意見交流をする形で研究を進めた。意見交換では、単なる取組に対しての評価で終わるのではなく、どのような手立てや働きかけが自己指導能力をさらに高めることができるのかなどについて話し合った。

４　研究の概要

(1) 機能としての生徒指導

様々な教育活動を通して生徒指導を機能させる場合、児童生徒に「自己存在感」を与え、自分の行動の仕方を「自己決定」することのできる場を与えることが重要であると考える。そして、これらを「共感的人間関係」を基盤にして作用させているとき、自己指導能力が育成され、心豊かな児童生徒が育まれると考えられる。

(2) 研究仮説のモデル

児童生徒の自己指導能力の育成

その時、その場で、どのような行動が適切か、自分で考えて、決めて、実行することができる。

↑

① 自己存在感を甘受させる活動（居場所づくり、個性を認める）
② 共感的な人間関係を育成させる活動（よりよい人間関係、連帯意識）
③ 自己決定の場を提供する活動（自ら選択できる場、主体的な活動）
④ 安全・安心な風土を醸成させる活動（安心して学校生活を送れる）

(3) 研究内容

ア 一人一人の児童生徒に自己存在感を与える

複雑な家庭環境や人間関係の中で児童生徒は心の拠り所を求めている。教師の働きかけはもちろん、他学年との関わりの中で役割を与え、その働きを認めることで、児童生徒は自己存在感を感じることができる。

イ 教師と児童生徒、児童生徒相互の共感的な人間関係の構築

小学校では大縄大会やなかよしタイム、中学校では体育祭や文化祭などの学校行事を通して、児童生徒同士の人間関係つくられる。またその教師とも良好な人間関係をつくる機会にもなる。

ウ 自己決定の場の設定と、可能性の開発を援助

学校行事だけでなく、日々の学級活動において、児童生徒に適切な役割を与える。自分たちで考え、行動させて適切な評価をする。自己決定、成功体験を繰り返し経験させることにより、責任をもって行動することができるようになる。

エ 学校や学級が拠り所となる場の提供

学校や学級に入れない児童が多くなってきている中で、別室登校という形で学校へ足を運ぶ機会を設ける。学校での生活は、自分で計画を立てて過ごすなど、学校によって対応はさまざまである。ただ単に勉強が嫌だから別室へ行く、そこへ行けば勉強以外にも何でも自由にできると思われないためにも、別室で勉強する場合には、保護者と連携を取りながら、自分で計画を立てて学習に取り組ませることが、とても重要であると考える。

5 今後の課題

それぞれの学年や学級の取組について、生徒指導の視点から捉えることで、児童生徒の心や行動に変化が見られ、学校生活に対して前向きな姿勢を見せるようになった児童生徒もいた。取組だけを行うのではなく、どの視点を重視して活動を行っていくのか、教師が児童生徒にどのような声かけやアプローチを

しなければならないのかをしっかりと考えていく必要がある。

今後は、現在取り組んでいる活動を継続しつつ、改善を加え、より一層児童生徒が自己指導能力を高めていくことができるよう、研究に努めていきたい。